

熱中症による救急搬送の状況

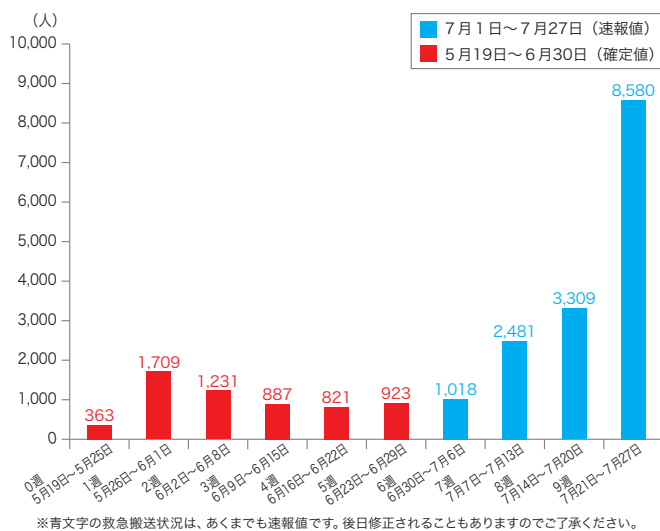
救急企画室

1 はじめに

7月上旬からの梅雨明け地域の拡がりとともに、全国各地で連続した真夏日が観測されるようになりました。気温の上昇に伴い、熱中症による救急搬送者数も増えていきます。熱中症の症状は、大量の発汗やめまいなどの軽度のものから、頭痛や軽い意識障害を起こす中等度のもの、また重篤な意識障害や腎機能障害、血液凝固異常を起こし、死に至る重度のものまで様々です。外界の環境に影響を受けやすく、また誰にでも起こりうる病態です。しかし、適切な予防対策を講じれば、その発症を防ぐことができます。

消防庁では、HPやtwitterを通じて熱中症情報の注意喚起や情報提供等を積極的に行うとともに、熱中症による救急搬送状況について調査・公表しています。

このたび、本格的な夏が到来し、引き続き熱中症対策が必要とされるこの時期に、皆様の熱中症に対する関心を高め、意識的な予防に努めていただくことを目的として、今年の熱中症による救急搬送状況について、最新の速報値（7月27日時点）から報告します。



※青文字の救急搬送状況は、あくまでも速報値です。後日修正されることもありますのでご了承ください。

図1 平成26年 熱中症救急搬送人数 (週別推移)

2 熱中症救急搬送人数 (週別推移) (図1)

5月下旬から6月上旬に一部の地域で、連続した高い気温が観測された時期と、7月上旬から全国的に梅雨明け

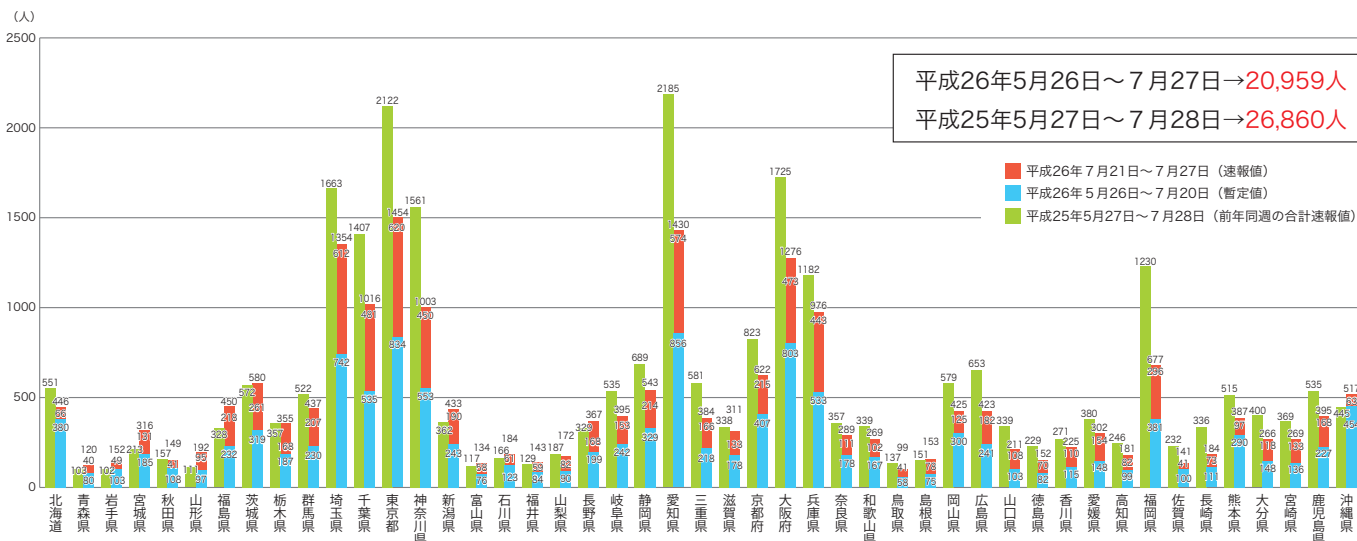


図2 平成26年 熱中症救急搬送人数総数 (都道府県別昨年比)

けが始まり、それに伴って気温が高くなり始めた時期に、熱中症救急搬送者数の増加が見られます。また、7月下旬に37都府県での高温注意情報が発令された第9週の熱中症救急搬送人数は今年最多の8,580人となり、第8週の2.7倍増となっています。昨年同週と比較すると搬送人数は4,687人多く、平年よりも多い状況でした。急激に気温が上昇するような環境の変化に体の順応が追いつかなかったことも熱中症搬送人数の増加の要因のひとつと考えられます。

3 熱中症救急搬送人数総数（都道府県別 昨年比）（図2）

今年の第1週から第9週（5月26日から7月27日）までの熱中症による救急搬送人数は20,959人（昨年度未調査の0週363人を除く）で、昨年同時期（第1週～第9週）の26,860人と比べると5,901人（22%）減となっています。昨年と比べ、全国的に梅雨明けの時期が少し遅かったことも影響していると考えられます。

4 年齢区分別搬送人数（図3）

今年の第0週から第9週までの熱中症による救急搬送人数の合計21,322人のうち、高齢者が9,805人で最も多く、次いで成人7,757人、少年3,512人、乳幼児247人、新生児1人となっています。救急搬送人数の半数近くを高齢者が占めます。高齢者は暑さやのどの渇きを自覚しにくいなど体の変化に気づきにくい状態であることが多く、それが原因のひとつと考えられます。また、小さな子供は汗腺の発達が未熟で、体温調節が苦手であり、熱を放散しにくく、熱中症にかかりやすいといわれています。

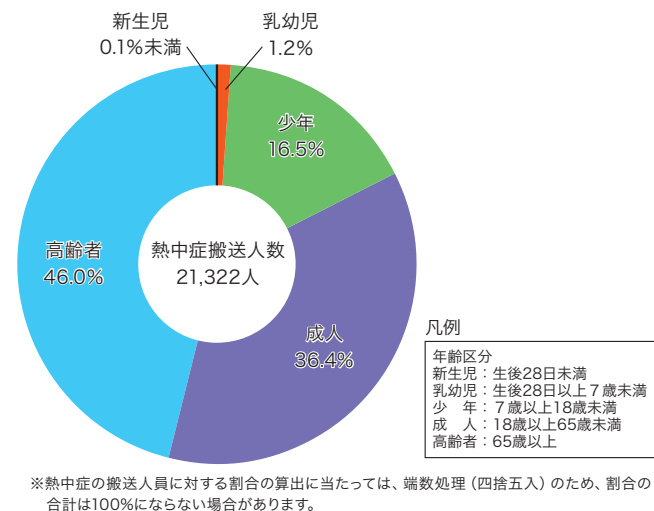


図3 年齢区分別搬送人数

5 傷病程度別搬送人数（図4）

今年の第0週から第9週までの熱中症による救急搬送人数の合計21,322人のうち、軽症が13,944人で最も多く、次いで中等症6,591人、重症449人、その他307人、死亡31人となっています。

熱中症の症状は対処のタイミングや、年齢等傷病者の背景の違いにも影響を受け、刻々と変化をします。中には、短時間で重篤な状態に陥る場合もありますので十分に注意が必要です。

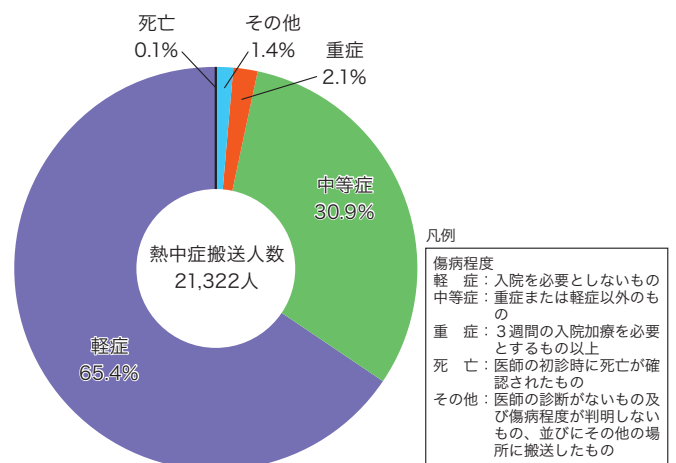


図4 傷病程度別搬送人数

6 おわりに

熱中症を理解し、予防行動を取ることで、熱中症は発症を防ぐことが可能です。また、周囲の気遣いで熱中症弱者といわれる高齢者や子供の発生を食い止めることもできます。

消防庁HPでは熱中症による救急搬送状況の速報値を毎週発表するとともに、予防のポイントや応急手当についてわかりやすくまとめた「熱中症対策リーフレット」が入手可能です。こうした取り組みを活用し、予防に役立て夏を上手に乗り切りましょう。

消防庁熱中症情報

http://www.fdma.go.jp/neuter/topics/fieldList9_2.html

熱中症対策リーフレット

<http://www.fdma.go.jp/html/data/tuchi2605/pdf/260514-1.pdf>

問い合わせ先

消防庁救急企画室 寺谷、平井、大迫
TEL: 03-5253-7529